

今月の一言 譲りあい交通：道路交通法が34年ぶりに改正され、自転車が車道通行へ戻る。自転車の歩道走行は、対自動車事故削減の一時避難だった。地球環境と健康によい自転車を交通手段に活かすには、道路構造の改善と幼時からの弱者優先の譲りあいの交通教育が重要（大隈 哲）

Topics

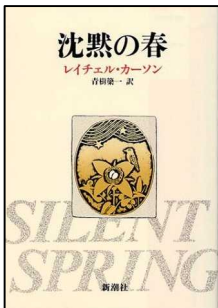
- NSRIは7月15日(日)～16日(月)工学院大学新宿キャンパスにて開催された『全国都市再生まちづくり会議2007』に、まちづくり、参加・支援企業として出展いたしました。
- 7月25日(水)～27日(金)東京ビックサイトにて開催される「エネルギーソリューション&蓄熱フェア'07」に出展します。蓄熱フェアでは、ヒートポンプ・蓄熱を始めとする最新の電化の技術の出展があります。

地球環境に警鐘をならした3つの書

今年4月、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の第4次報告書で「将来の地球温暖化を2程度で安定させるためには、2050年の温室効果ガスの排出量を2000年の半分とする必要がある」ことが示されました。また、アル・ゴアの「不都合な真実」が社会的な反響を呼び、最近では雑誌Newtonが「地球温暖化」を特集するなど、ようやく事の深刻さがメディアを通して明らかになってきたように思います。一方で、早くから地球環境に警鐘を鳴らした古典とも言うべき書がいくつかあります。すでに読まれた方も多いと思いますが、そのうちの3つを紹介したいと思います。(丹羽英治)

沈黙の春 *Silent Spring* レイチェル・カーソン

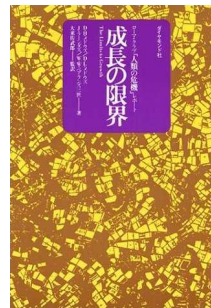
レイチェル・カーソンの「沈黙の春」が出版されたのは、実に45年前、1962年です。地球環境にはじめて警鐘を鳴らした書として有名なもので、最近では新潮文庫から文庫版も出版されています。レイチェル・カーソンは海洋生態学者で、DDTをはじめとする農薬などの化学物質の危険性を「そして、鳥はなかず」「春だけがやってきた」という有名なくだりで訴えています。害虫に向けられた武器がほかならぬ人間がすむ地球そのものに向けられることになることも予見しており、この書の反響によって、当時米国政府が推進していた「化学薬品による有害生物絶滅計画」という、現在では信じられないような政策が中止になったと言われています。



成長の限界 *Limits to Growth* メドウズら

メドウズらの「成長の限界」は30年以上にわたる3作シリ

ーズになっています。第1作の「成長の限界」が出版されたのは1972年、20年後の1992年に改訂版「成長の限界を超えて」、さらに10年を経て2005年に第3作「成長の限界/人類の選択」が出版されています。「成長の限界」は当時の著名な科学者、政治家からなる「ローマ・クラブ」の委嘱を受けたメドウズらが、システム・ダイナミクス理論とコンピュータモデリングを用いて、世界の人口と産業経済の長期的な成長の予測分析を行ったものです。「行き過ぎて崩壊するメカニズム」などが示され、システム学の視点から地球環境の持続性に警鐘を鳴らした書といえます。なお、最新の第3作では、指標としてエコロジカル・フットプリントが定義され、再生のためのシナリオが示されています。



ファクター4 *Factor4* ワイツゼッカーら

1995年に出版(日本版は1998年)されたワイツゼッカーらの「ファクター4」は、副題にあるように、「豊かさを2倍に、環境に対する負荷を半分に」と呼びかけています。単に、環境対策を進めるだけではなく、世界の豊かさを2倍にしていかなければならないという「エネルギー生産性の4倍化」を唱えており、これは、「危険なファクター4(4倍化)に直面している」という警告と解釈するのが正しいのかも知れません。著者自身が言っているように、「技術進歩の方向性を変えよう」という野心的な書です。日建設計総合研究所が今年1月にうたった『ファクターXのまちづくり・都市づくり』の「ファクター」は、いうまでもなく、この書の「ファクター」をさしています。(丹羽 英治)



定期配信をご希望の方

定期配信を御希望の方は、下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。

(chihiro.kimura@nikken.co.jp 担当: 木村千博)

編集後記

関東はまだ梅雨も明けていないのに、クールビズが広まったためか、すでに街中ではノーネクタイ、半袖ワイシャツのサラリーマンが目立つようになりました。本格的な夏になったらどうなのでしょう。(T)